て「神の戒めに従うキリスト者の生とは何であるか」ということが、彼の究極の問いとなって行ったのである。

ボンヘッファーの『倫理学』は、彼自身の手によって完成されることなく、その死後ベートゲによって断片的な論文が編集出版されたものであるが、その成立事情は編集者の序の中に、このように記されている。

「すでに『服従』(Nachfolge, 1937) を完成した頃から、ボンヘッファーはキリスト教倫理の問題に新しい接近を試みようと計画していた。そして彼はこの仕事をもって自分のライフワークを始めようと考えていた[2)]」

ここに明かなように、1937年以来、ボンヘッファーは『倫理学』を書きたいと願っていたが、実際に着手したのは1940年であった。ベートゲはその間の事情を次のように説明する。

「1939年6月、ボンヘッファーはジョン・ベイリー教授によって、クロール講演財団のためにエディンバラで講演することを依頼された。その時彼は、その講演を彼のキリスト教倫理のための書物の基礎にしようと願った。しかし大戦が彼の準備を中断させた。そして牧師研修所の仕事を辞め、ドイツ国家内のいかなる場所でも公やけに語ることを禁じられた1940年迄は、この仕事に取りかかることはなかった[3)]」

『倫理学』に収められた論文は、第二次世界大戦中、ナチスに対する抵抗運動に従事しつつ、限られた時間と状況の中で書きためられたものである。したがってあるものは完成しているが、あるものは未完であり、発見されなかった資料もあったかも知れない。その意味では、本書は断片的で未完成の資料から成立したものであると言わざるを得ない。配列の順序も二度にわたって変えられている。したがってベートゲ自身が、「この書物は、ボンヘッファーが出版しようと思っていたままの形の『倫理学』ではない[4)]」と率直に語っているのは正しいであろう。

しかしそれにも拘らず、『倫理学』は、その分量と内容から見ても、ボンヘッファーの中心的な重要な著作であることは否定できない。彼の神学思想の中核を明らかに示す書であり、単にキリスト者のみならず、この時代を生きるすべての者に深く問いかけて来る書物であると言うことができるであろう。

三、ボンヘッファーの『倫理学』の基本的立場

ボンヘッファーの『倫理学』は、すでに述べたように、断片的な論文が編集されたものであるが、その断片性を余りに強調しすぎるのは正しくないと、わたしは考えている。なぜなら、根本的な問題の把握を通して、その断片性は真実な凝集性を示しているからである。

少し長い引用になるが、われわれは次の叙述の中に、ボンヘッファーの倫理的思考の基本的立場を読み取ることが出来るであろう。

「しかし、このわたしと世界の現実それ自身が、全く別の究極的な現実、すなわち創造者・和解者・救済者なる神の現実によって包まれているということが示されるならば、倫理的な問題はその時から、全く新しい展望の下に考えられることになる。わたしが善くなることや、この世界の状態がわたしの行為を通してより善くなることが究極の重要事ではなくて、神の現実が究極の現実としてあらゆるところで示されることが、最も大切なことなのである。神が究極の現実として信じられているところでは、すべての倫理的関心の出発点は神が御自身を善き方として示され、もしこの事が、わたしと世界とは善いものではなく、徹底的に悪しきものであるということがあらわにされる危険を持つとしても、それを恐れないということである。・・・・自分自身の善や世界の善についてのすべての問いは、神の善についての問いが先づなされない限り今や不可能である。なぜなら、人間や世界の善は、神をぬきにしては一体どのような意味があるのであろうか。しかし究極的現実としての神は、御自身を告知し、証しし、啓示したもう方であり、したがって、イエス・キリスト

2) Dietrich Bonhoeffer : Ethik. S. 11. (以下 Ethik とのみ省略して用いる)
3) Ibid., S. 11.
4) Ibid., S. 11.